

寄せ場学会通信 7

1989年

3月

定価 100円

学会事務局 東京都杉並区善福寺2-6-1東京女子大学松沢研究室気付 電話 03-395-1211 郵便振替 東京8-117184
西日本事務局 大阪市東淀川区瑞光5-8-A-204中根光敏気付 電話 06-325-7648



寄せ場の解体

とは

どうしよう

か

関曠野

以下は寄せ場学会に対する批判というより、追加的注文として受け取って頂きたい。昨年暮れから今年の正月にかけて釜ヶ崎と山谷をまわってきた。そして暖をとるためのたき火の煤で顔を真黒にしたママの労働者や、椀一杯の炊き出しの飯を手にするために行列を作るママの人々に混じってドヤの風景を眺めているうちに、いろいろな思いがこみ上げてきた。そうした思いの一つとして、年報第一号を読んだときに感じた物足りなさが、かなり明確な思想の

形をとって私の中に浮上してきたのである。

寄せ場をどう捉えるか

世間様からみれば、ドヤはまともに目にしてはならないおぞましい瀕落の場、都市の恥部なのだろう。たとえ昨今のドヤにはエア・コン、カラーテレビ付きの「ビジネス・ホテル」が立ち並んでいるとしても、やはり寄せ場は世間様が見てはならぬものである。だが私にとってはカマヤヤマはあらゆる虚飾や保証をなぐり捨てた上でどっこい生きている人間の根源的な活力、厳しく凄絶な生の表情に触れ、逆に自分がその表情に見えられているような気がする日本国内で殆ど唯一の場所である。寄せ場にこそ人間があり、生がある。

だから寄せ場の殺菌、圧殺、拡散、消滅を理想とする都市再開発や都市美化運動を私は許しておけない。とはいえ、こうしたデベロッパ美学を裏返す形で、寄せ場の存在も都市の環境と風景の多様性を保つためには許容さるべきだなどという、ドヤの人々を動物園の珍獣あつかいする「良心的」市民主義者の議論を我々は、歓迎できるであろうか。ここにアポリアが出現する。そもそも寄せ場の解体とは、その住人を福祉行政や職安活動の充実によって市民社会に再統合することなのであるか。それとも都市の風景に彩りを添える異形の者たちとして、彼らをゲッターないし特別保護区に閉じ込めておくことなのか。

どちらでもないとするれば、アポリアに対する古典的マルクス派の答えは、「プロレタリア革命」となる。寄せ場の労働者は体制の最大の受難者であるが故に、否定の否定として革命の潜在的主体である。

この手の「白い馬は実は黒い」式の弁証法的詭弁に対する批判はここではやめておく。問題にしたいのは、寄せ場学会とマルクス主義との関係である。教条マルクス派にもつくづく愛想が尽きるが、マルクス主義者ではないのに一昔前のマルクス派の図式を無意識裡に引きずっているというのも困りものである。言い換えれば、寄せ場を総資本対総労働、階級闘争、プロレタリアートといった図式に由来する発想で捉えることは、最良の場合でも、抽象的、親念的かつ粗雑な見解につながるだろう。

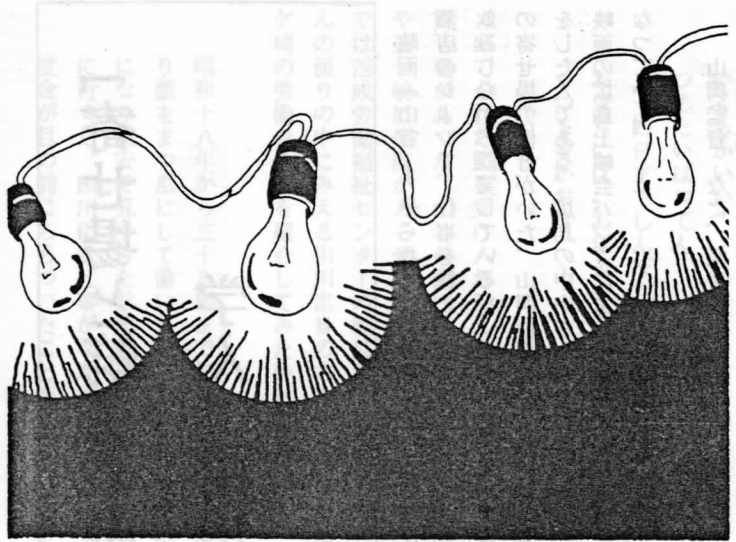
私自身は以前から階級概念を階層化 *stratification* の概念に置き換え、マルクスの階級闘争論には様々な限界や誤謬があるとみているのだが、とにかく寄せ場の人々が「階級」を構成していないことは確かである。第一に、彼らは現代日本の平均的賃金労働者の世界からはじき出された、ないしは自らみ出してしまった周辺的なマイノリティである。第二に、彼らの出身階層はかなり多様で雑多な筈である。もちろん彼らの中に大富豪の息子はいないだろうし、相対的に不利な立場にある階層の出身者が多いかも知れない。しかし調査の結果ある特定の層の出身者が多いと判明したところで、寄せ場に来るのはやはりその層の中の少数者であろう。その上、彼らがドヤに流れてきたきっかけも、会社の倒産や離婚からギャンブルや暴力団員歴に到るまで、各人各様である筈だ。そこに一定のパターンがあるかどうか、私としては是非知りたい。

ともあれ寄せ場の住人の中に、貧困と差別の下に生まれ育ち鉄のごとき必然性によって自動的にドヤに来てしまったものは、おそらく一人もいないだろう。寄せ場においてこそ、「経済決定論」は通用しないだろう。出身階層という問題がどうでもいい訳

ではない。しかし彼らは、各自が一個の主体として日本の因循姑息な社会といざこざを起した結果としてドヤにきた。幸か不幸か、日本はフィリピンではない。いじましくも息苦しいこの国の社会に小心でもドヤなどには行かずにすむ。小心で卑屈な者は決して食うには困らない。逆に言えば、ドヤの人々は階級支配の被害者というより、自ら落ちこぼれることでこの社会への順応をインテリ風の理屈抜きに拒否した人々と言える。

だから私は、全ての虚飾をこそぎ落として裸一貫になつた彼らの凄絶な生き方に深い共感を覚えるのだ。彼らのある者はかつてはカタギの警察官や自衛官であり、暴力団員であり、あるいは大卒の会社員だった。妻子があつた者も少なくはない筈だ。彼らは日本の社会を統制している規範に基づいてワガママ、ルーズ、非行、脱線、常識と協調性の欠如その他の名で世間様が判決を下すような市民社会との衝突の結果としてドヤへ来た。禁令を犯して自由の実を味わおうとした反逆に対する懲罰がドヤの「非人」となることなのだが、彼らはそこでも、どっこい生きている。

どうか私の見解を「ドヤに落ちる者は自業自得」という行政当局や小市民どもの見解と混同しないで頂きたい。私が強調したいのは、寄せ場の人々を「自由な主体」として捉えなおすこと、そして当然のことながら、彼らを福祉国家の小市民に「更生」させることがその解放ではあり得ないことである。そして私が何よりも知りたいことは（つまり寄せ場学会に調査してもらいたいことは）、各人のパーソナル・ヒストリー、各人が社会といざこざを起してドヤに来るにいたつた経緯である。過去を語って



れるドヤ居住者の数は限られると思うが、それでも意義深い調査ができると思う。

市民社会は自由に対する恐怖によって成立し組織されている。私もドヤの人々と共に、自由という禁断の味の知りたい。調査は、あえてカント風の用語を使えば、「寄せ場労働者における自由の理念」といったものを明らかにすることができよう。他方で彼らは、いかなる社会学者よりも、日本の社会を統制している規範と権力の本性を自らの体験をとおして知り抜いている。それは「資本」と言った抽象的なお題目を唱えているだけでは決して見えてこないものだ。こうしてドヤに住む少数者の生活史が、日本国の多数派の真実、市民社会の多数者を呪縛し

恐怖させている力についての真実をあらわにすることになるだろう。

土木建設業の解体

紙面が残り少なくなってしまった。私がおもう一つ寄せ場学会に提起したい問題は、寄せ場と土木建築業界との関係である。この両者はまだまだ、「資本と労働」といった抽象的なレベルで理解されているのではない。景気調節用に使い捨てにされる底辺労働力といったマル経の決まり文句では「自由な主体」としての寄せ場労働者が見えてこないように、先のような理解からは寄せ場の解体が具体的な課題やイメージとして出てこない。我々は、寄せ場の存在と土木建築業界が不可分であることの意味を、もつとつきつめて考える必要がある。両者の関係は必然的なものだ。してみれば寄せ場の解体とは、土木建築業および土木建築学の解体でもなければならぬ。

つまり、現代日本の土木プロジェクト、居住や都市計画の在り方は、一方には資本家と専門家、他方では寄せ場労働者という両極構造抜きには考えられないものである。寄せ場の解体は、土木、建築、都市計画の別な在り方を要求する。ここで我々は、史上最初の社会主義思想の書「ユートピア」の中で、トマス・モアが道路の保全を全市民が自らの手でなすべき仕事としているのを思い出してもいい(同書第二巻第四章「職業について」を参照)。あるいは、ソ連や北朝鮮という日本の左翼の間でもきわめて評判の悪い国々においても、全市民総出の街づくりという試みがあったことを想起してもいい。

さしあたり土木建築業の解体は、女、子供、老人

を含む素人が大半を自らの手で作れるような住宅、建築、道路、土木工事しか容認しないことを意味する。都市計画における住民主権はその当然の前提である。その結果として、超高層ビル、高速道路、本四架橋、新国際空港、東京湾岸開発といったプロジェクトがすべて不可能になり、日本にはせいぜい木造の山小屋やバオやレンガ敷きの小道程度のものしか存在しなくなったとしても、私の知ったことではない。我々の居住と都市計画への権利の進歩だけを、我々は土木と建築と都市の進歩と呼ぶことができる。聞くところによれば、山谷の労働者福祉会館は素人のボランティアらの手で建てられる予定という。財政事情などもあってのことかも知れないが、これは寄せ場解体の闘いとしても画期的なことだと思ふ。

最後に再び権力論の問題に戻ると、古代の東大寺建立から開発領主の領地争いや秀吉の大坂城建設を経て現自民党の「内需拡大」政権に到るまで我々は日本の権力を、すぐれて土木開発型権力として特徴づけることができるように思う。当時としては大がかりな土木干拓工事によって無から作られた人工的行政都市江戸において、「寄せ場」なる言葉が生まれたことも偶然ではあるまい。そういえば鹿島建設の社史も江戸期にさかのぼる。江戸城の將軍と大名の対極に無宿者の寄せ場がある構造は、ある意味では今日も変わっていないし、日本で出世するのは秀吉流の土木工事現場監督型の人間であるという伝統もゆらいでいない。寄せ場は日本の都市のまごうかたなきアイデンティティであり続けている。故に寄せ場の人々はマージナルな存在であっても、彼らがあつた日本社会の冷酷で狡智にたけた権力構造は、マージナルな問題どころではないのである。

(思想史)

「寄せ場と筑豊の炭坑失業者」を

学んで田川の高校生は……

横川輝雄

映画『山谷ーやられたらやりかえせ』の野田屋酒店のシーンで、仕事を終えた日雇労働者たちが立飲みしながら談笑しているが、その中に、田川出身の寄せ場労働者がいた。山岡監督と元気のいい会話をした人である。広島の中山さんたちが作ったその映画の広島上映会パンフによれば次のような会話になっている。

山岡監督 なに、筑豊？

労働者5 福岡県田川郡……

山岡監督 方城つて町がある？ あつ、方城。

労働者5 その何という炭坑だった？

山岡監督 ああ、三菱方城鉱業所。

労働者5 だから三菱方城鉱業所。

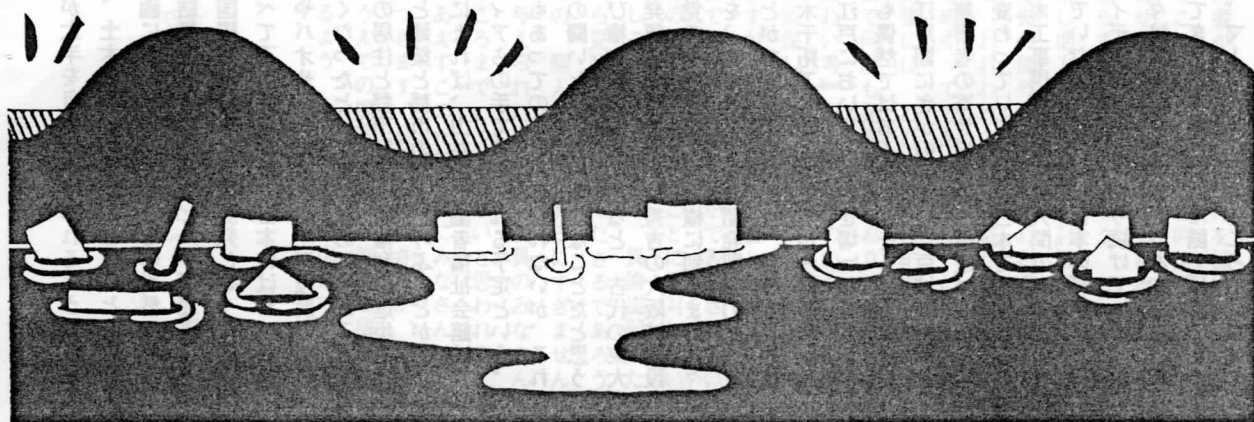
日本資本主義の1955年以来の「高度経済成長期」に、筑豊の炭坑失業者には、寄せ場に移動して行った人々が多かった。彼らは、日本の「高度経済成長期」に切り捨てられたものであった。「エネルギー革命」というジャーナリスティックな名のもとで、アメリカ帝国主義のもとでの国際石油資本に追随した日本国内の勢力によって、筑豊の炭坑はつぶ

されたのであった。19世紀後半に江戸幕府が倒れたあと開山まで筑豊で掘った石炭は9億トンであったが、なお20億トンが埋蔵されていたにもかかわらず、である。

棄てられた民

筑豊から出ざるをえなかつた民は、日本各地に流れ出ていき（はるか南米にも散つて行つた）、高速道路を作り新幹線を作り工場労働者として働き、なとして日本の高度経済成長を支えたし、筑豊に残つた民は、悲惨な生活を余儀なくされ、筑豊の山の向うの小倉の魚町や福岡の東中州は高度経済成長期に涌き夜遅くまできらびやかにどんちゃん騒ぎをくりかえしていたのに、山のごちら側の筑豊の盆地はひっそり静まりかえり電気は切られタタミはふやけフスマやシヨージは破れ売血で生きていくしかないという「死の谷間」がアチコチに出現しカネミ油症にかかつたり、原発労働者になつて被曝する炭坑失業者も多く出たのであった。まさに筑豊は棄民されたのであった。

1982年に田川でおこつた自分の指を切つて保



険金をだましとつた事件で逮捕された人の一人は、炭坑の開山期に少年時代を送り、中学校を卒業後、集団就職で東京に出たあと日本各地を転々としたあげく田川に帰ってきた人であったが、その彼の小学五年生の時の詩は、棄てられた民の苦渋を何よりもあらわしている。朝日新聞によれば次のような詩である。

足

足が とてもつめたい

勉強中 ぞうきんを下において

その上に 足をちぢめておくと

いくらかいい

つめたいばつてん

二十四日までしんぼうすると冬休みがくる

お正月には お年玉をもらうて

くつ下をかおう

棄てられた民を受け入れてくれたところの一つに寄せ場があった。山谷争議団や釜日労の好意で山谷や釜ヶ崎に何度か入らせてもらったりしたが、ここでは西成労働福祉センターの職員である海老一郎さんの便りの中に見える田川出身の六十才を過ぎた釜ヶ崎の労働者の姿を紹介してみたいと思う。

昭和十八年から三十八年まで三井田川で文字通り顔をまつ黒にして働いたが、その炭坑も閉山になり職安で見つけた兵庫県尼崎市の建設現場に行った。田川には仕事がなかったのと雇用支度金が目の前にちらついたことから、その場で

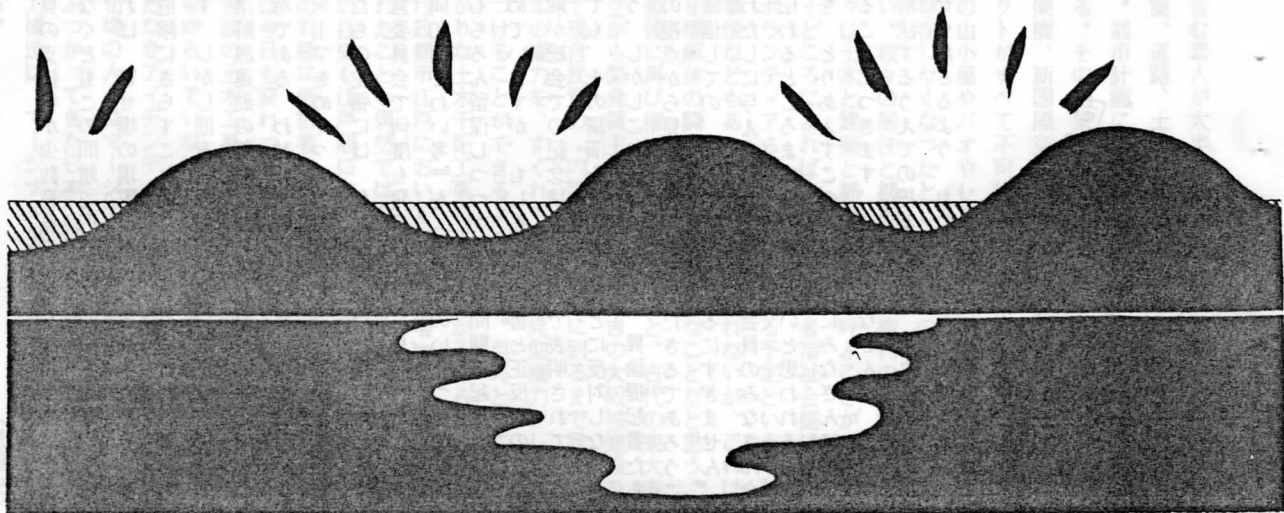
すぐにオーケーした。しかし行ってみると話は大きくちがつていた。結局、最後に釜ヶ崎にきた。いま、故郷の田川がなつかしい。死ぬ前に一度帰ってみたい。

このような寄せ場と筑豊の炭坑失業者のかかわりを学んだ田川の高校生は「いつも底辺の人だけが犠牲になつていることに大きな怒りを感じる」といいながら次のように書く。

私は暖かいぬくぬくとした生活を送ることを当り前だと思つていた。でも、今はそれが当り前ではないと気づいた。寄せ場の人たちの事を聞くうちに……。寄せ場の人たちはかわいそうなどとも思つていた。そんな同情がやさしさだと思つていた。それが大きなまちがいだと徐々に気づいていった。同情することしかできない私こそ本当はかわいそうな存在なのかもしれない。

こうして、彼らは、東京の修学旅行に行つたとき、新宿駅東口や池袋駅に寝ていた労働者に気がつき、その人たちの生きてきた道すじを想像してみるのである。

(田川農林高校教員)



第二回総会での

師岡佑行氏の記念講演をめぐる

経過報告

一九八八年四月二、三日に行なわれた日本寄せ場学会第二回総会にさいして、京都部落史研究所の師岡佑行氏に記念講演をお願いしたことは、すでに会員のみなさんもご承知のとおりです。総会終了後引き続き開かれた運営委員会で、この師岡氏の講演を録音テープから起こして小冊子として公刊することが確認され、その具体的作業が西日本支部に委ねられました。しかし、その後、海外出張、緑者の弔事などでその運営委員会に出席できなかった運営委員（二名）から、この方針にたいして異論が提起されました。

異論の趣旨は、①師岡氏の講演のうち、『同和はこわい考』（藤田敏一著、呵呷社発行）を肯定的に評価する部分があった。②『同和はこわい考』をめぐっては、部落解放運動の内部で評価をめぐって意見の対立があり、同書を支持する見解が寄せ場学会の総会の席で表明され、しかもそれを小冊子にして刊行することは、寄せ場学会がこの対立の一方にのみすることになる。③自分（異論提起者）が解放教育と取りくんでいる現場においても、師岡氏講演が公刊されれば、自分の活動が決定的に困難とならざるをえない。④あるいは、自分（別の異論提起者）は現在とくに部落解放運動にたずさわっていないが、

右の小冊子を公刊することになれば、もしくは公刊に反対の意志表明を公然となさねばならないことになれば、部外者という位置をすてて、部落解放の運動に積極的にたずさわる責任が生じてくる。⑤したがって、右の小冊子を公刊することにも、『同和はこわい考』の評価をめぐる議論を寄せ場学会の内部に持ちこむことにも、反対である。——以上のような諸点です。

運営委員会では、この異論提起を受けて、討議を重ね、昨年十月二十二日には、海外出張を終えて帰国した委員をも交えて、この問題を論議しました。しかしながら、現在にいたるまで、結論を見出すことができないままになっています。師岡氏には、この経過の概略を口頭でお伝えし、小冊子刊行が遅れていることについてご了承をおねがいしましたところ、「討論されること自体に意義があるのですから」というご返事をいただきました。

運営委員会での決定は、形式主義に徹するならば多数決の原理によるべきかもしれませんが、そのような形式主義をみずからの原理にしたくない、という点で、すべての委員の見解は一致している、とわたり（運営委員長）は認識しています。少数意見の提唱者が多数意見に譲歩するにせよ、あるいは多数

意見の支持者が少数意見の精神を採用するにせよ、少なくともこの問題で形式主義の決定を強行するとすれば、寄せ場の現実とかかわる基本姿勢そのものを危険にさらすことになるだろう、とわたしも考えます。しかし他方、この問題を討論すること自体、部落解放運動の部外者たるわれわれの責任をこえた行為である、われわれの討論は寄せ場と直接かかわるテーマをめぐってであるべきだ、という異論提起者たちの主張には、わたし個人は納得しかねます。

運営委員会で何度も発言したとおり、わたし自身は『同和はこわい考』を（それへのいくつかの疑問点をもろろん留保しつつ）貴重な問題提起として受けとめています。しかし、もしも仮に同書と正反対の立場の見解が総会での記念講演のなかで表明されていたとしても、その講演を公刊することに反対しないでしょう。しかしこれは、もちろん、異論提起者たちが別の視点から見解を表明してくださるであらうことを確信しての、個人的見解であるにすぎません。

わたしに与えられた役割は、会員のみなさん全員に伝わりるところまでいっていないと思われるこの事態を、とりあえずこのたび正式にみなさんにお伝えすることになります。会員のみなさんが、この問題を解決するうえで、の提案や批判、等々を積極的にお寄せくださるよう、おねがいする次第です。

（池田）

同和はこわい考
藤田敏一著
呵呷社発行
1988年10月22日
池田敏一

日本寄せ場学会事務局から緊急のお願い

去る一月一五、六日と二月二五、六日の、いずれも運営委員会において、一九八九年度から会費を値上げし、年間の一般会費一万円、同学生会費五千円とする案が原則的に了承されました。もちろん、この後総会において承認されなければなりません。それに先だつて予め会員の皆さんに事情を説明しておいたほうがいい、という事になりましたので、改めてここに少し詳しく述べておきたいと思えます。

第一の理由は、なんととっても経済的困難です。会費の納入事情はきわめて悪く、四〇―五〇%にしか達しておりません。他にまったく何の収入も無いのですから、少しでも活動を起こそうとすれば必然的に赤字にならざるを得ません。現在事務局や運営委員会のメンバーは、すべて手弁当でやっているわけですが、限界状態であり、活動力の減退が見られ

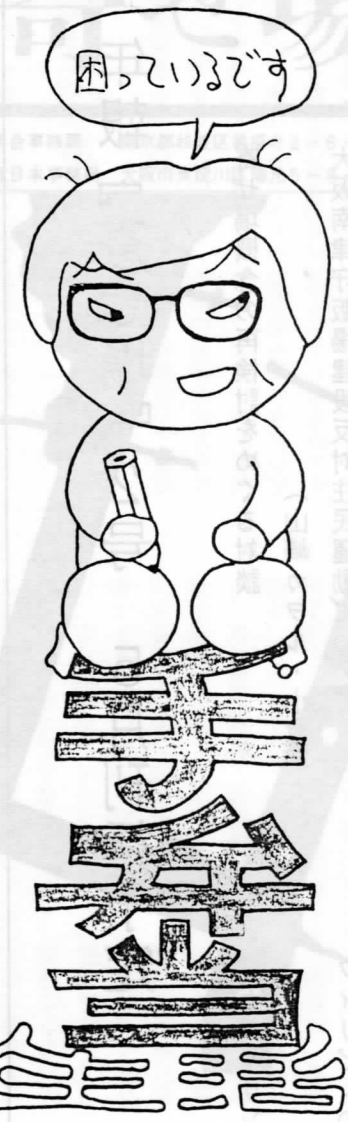
るようになってきました。(という訳ですので、会費が未だの方は、ぜひ大至急納めて下さるようお願い致します)。

第二の理由は、八九年末完成予定の「山谷労働者福祉会館」に、寄せ場学会として一室を借り受け現地事務所とする構想を、実現するための財源としてです。現地事務所とは、まず、そこに行けば全国の寄せ場の情報を知ることが出来るものであることが必要とされるでしょう。これは、言うべくしてなかなかに行い難いことです。しかしながら、三年目に入った本会としては、それなりに性根を据えて、充分準備を整え、八九年度こそ実現に向かって始動開始と行きたいと考えています。そのためにも寄せ場に関する文献を本格的に調査し(リスト作り、所蔵機関の調査)、コピーを取り、内容を把握し、註付

きの書誌としてまとめる、というかねてからの課題に今年こそ取り組んで行く覚悟です。現在でも多少は資料が手元に溜っておりますし、他に組合関係とか、行政機関の発行した印刷物類なども入手可能です。従つて、現地事務所には集まり次第そういった資料を並べ、(池田さんが無料で譲つて貰えるという)複写機でコピー可能、という体制を作つて行きたいと思えます。出来れば週の半分ぐらいは、誰かがかならず同事務所を訪めてくれる、というのが理想的なのですが、(松沢は、毎週末には行きます)。

次に、現地事務所があれば、寄せ場に関心があるが必ずしも組合活動などには心が動かないといった部分、若者や子供や女性や高齢者や「障害」を持った人たち、日本や世界のジャーナリストなども行き来し易く、互いの交流のハ場となり得るのではないかと考えます。寄せ場の問題は、孤立した個別寄せ場、というふうには捉えることはできません。現存社会総体との関係において、視られなければなりません。社会の縮図と言われる寄せ場を見ることによつて、自分自身を、またその自分を取り巻く(大、中、小の)社会を、より良く理解することが可能となつて来るでしょう。寄せ場学会と現地事務所は、そういった場合の接点になり得ると思えます。また、寄せ場とこれを取り巻く内外の社会との間の交渉と往來を保障して行く事は、学会を創立するそもその目的でもあっただろうと思えます。

以上のような理由により会費値上げに踏み切りたいという提案を、五月の第三回総会に提出するつもりです。なにとぞご了承のほど、願ひ上げます。



(松沢)

年報『寄せ場』2号 5月刊行予定

寄せ場概念の再検討をめぐる対談

(山崎カヲル・小倉利丸)

大阪南津守飯場建設反対住民運動について

(池田浩士)

福岡野宿者襲撃裁判レポート

(和田研三)

外国人出稼ぎ労働者について

(田中宏)

ソウルオリンピックとスラムクリアランス

(柳在順)

フィリピンのスラム

(青木秀男)

ラテンアメリカのバリオ

(山崎カヲル)

*いずれも仮題です。

寄せ場学会第3回総会

記念講演

「下層労働者と天皇制」 金賛汀 (交渉中)

ほかに「寄せ場の医療問題」

「寄せ場の外国人出稼ぎ労働者」など

日時 5月13日(土) 1時〜5時

14日(日) 10時〜5時

場所 東京経済大学5号館101教室

(中央線国分寺駅下車)

編集後記

☆毎度のことながら天皇やお上の代替わりは寄せ場になんら本質的な変化をもたらさないかのようです。来年度の学会のメインテーマは「寄せ場と天皇制」になるようですが、何かおもしろいアイデアがある人、特になかなかお目にかかることのできない地方の人、事務局まで意見をお寄せください。☆また、本号に掲載した、寄せ場の解体ということについて、師岡氏の講演や『同和はこわい考』について異論がある人はどしどし投稿してください。

(T)